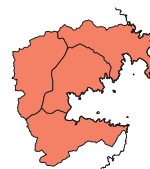


火葬ができない 弔うこともままならず



▲町内の墓地から海を臨む。震災前は建ち並ぶ建物の向こうに海が見えていた。今は海が近く見える。

捜索隊の手で発見された遺体が、次々とバイサイドアリーナ文化交流ホールに運び込まれた。おびただしい数の亡骸がホールに横たわる光景は、それが現実であるとは受け入れがたいものだった。

震災直後、宮城県には「遺体を安置する場所がない」「棺が足りない」などという沿岸自治体からの連絡が相次いだ。県内 27 カ所の火葬場のうち 7 カ所は被災するなどして稼働できず、宮城県の火葬能力は燃料不足もあって通常の 4 分の 1 程度に落ち込んだ。1 日 50 体程度の火葬しかできず、遺体の数に追いつかなかった。

2011（平成 23）年 3 月 13 日の新聞で、「南三陸町 1 万人不通」と大きく報道されたことを受け、宮城県からは町長に「まずは 1,000 体分の棺を送ります」と連絡が入った。犠牲者の数がまだ見通せない中で、町長は「当町では一体何人の被害が出るというのだろう」とその数から被害の大きさを想像したという。

被災各地で棺が不足する中、当町には棺の材料がトラックに山積みになって届いた。被災した住民たちがそれを荷下ろしし、ひとつひとつ組み立てた。

町の火葬場も停電で稼働できなかった。引き渡された遺体を火葬することもできず、遺族は途方に暮れた。近隣自治体の火葬場も順番が来るまでには時間がかかりすぎる状況だったため、山形県など、遠く県外で火葬する遺族も多くいた。仮埋葬の土葬を余儀なくされた被災自治体もあった中、南三陸町では仮埋葬という事態に至らずに済んだ。

しかし葬儀も行えず、火葬される棺をわずかに集まった身内で、寂しく見送るよりほかはなかった。

そして、今も行方不明の家族の帰りを待ち続ける人たちもいる。ある家では、あの日を最後に会えないままの家族の葬儀を行い、墓に名前を刻んだという。新たに名前を刻んだ墓に、何も埋葬するものがないという遺族の悲しみは察するにあまりある。